

馬医醜醜 中之第四

麻布大学所蔵

中之四

一 圓鏡卷

十二卷

以上

圓鏡卷第一

請之脈又請病生死之病相安藥集様々難書此無
字而難教之 牟仲圓於子孫此道於知收字可垂秘
以書化為易後与云々

一 守四季甲し莫忘古人意去有け道字魔云自作出標
藥成時短病必治故以後病短病長病流又長
病短病官則答失元字則治喜治更連成則必醫者
愁之入字者則治不悅又連成不醫為長短病共一時治
古人先立行天之天助哉

一 有りくの定藝の各様と云々有りくの定口觀動の脈大

さふめりらるる熱又細くふるふるさうさう無熱は号息の
又めけ軟動の脈とてこころ新く幽は動さうさうのさう
又云時々脚草のめくさうさう息は下胸の虚は脈の
脈神と息脈又えさうさうさう血虚又云虚熱とてさ
間ちこもさう息脈は浮とてさうさうさう但毛さうさ
さう下さう腎虚之中脈さう脾胃の虚はさうさう肺の
虚は右右有は傳

請病し古幽し知変

- 一 結る脈細きを避治服さうさう息あさうさう急はさ
- 一 急は軟動の脈とて急治服さうさう

- 一 尿治服のさう目さうさうさうさうさう下さうさう
急治

- 一 肉解き暑不定やと治めさう

- 一 瘡根はさうさう治めさう又云根さうさう
急治

- 一 眼病目のさうさうさう急治さうさうさうさう早く治
又云目の内を急治さうさう急治

- 一 急治さうさう時背の虚はさう又中風さうさう肢のさうさ
さう急治さうさう治皮治さうさうさう急治
とさう急治又云急治さうさう時或肝虚急治

熱——凡ラしむと血脈を以てひら——
こ松如又悪くあり新法治龍耳草湯子テ治し
諸の病を治するものふさるるを治すも
是くもいひ治るる也

一 依の息病鼻息あつたこととたを治るるは息病
少息なるをいはず治す又云ハ内証長後も息病を
みむのつて息病なるも息病也

一 鼻病者治してなる鼻病の治るるは
治るるは鼻病の治るるは鼻病の治るるは
鼻病の治るるは鼻病の治るるは

一 前病とあるは夏秋之依脈の事を暑と見分脾胃は白
と能くして業とある也——同水操肝あるは方養臟
のつてあり治るるは熱の前病を養あるは方養臟
不立にせし熱の前病は治るるは前病は早治
すぬこ透れしことなるは治るるは腫
るるは治るるは口を治るることとすは治るるは
早く治るるは早く治るるは早く治るるは

圓鏡卷世第二

觀動脈之法

一 入脈一動なる二動入事ハ稀ハ外ハ物くなる肉を

く入リ脈は号但云るく今と云ふ激は病物と内は云り
はむは極大に入リ傳の脈は号こらめてもる脈は傳守白
の脈は号入脈ありる必入の沈入の脈と云きい毫の毫脈
傳乃脈大も又小をらひこらるるを傳入りて知傳の毫
く少あるは脈をこれの胸の毫す白の毫は脈を毫す白の
毫は脈を毫す白の毫は脈を毫す白の毫は脈を毫す白の
す白の毫は脈を毫す白の毫は脈を毫す白の毫は脈を毫す白の
一 外脈一動入二動をるるの稀きも入脈中常少張脈
か滞らひ外脈にて知外脈の毫息ありて熱はるるは
腫物出たりと云るる一 息は外脈ありて病をすし

一 此草の脈毫の病は号まもも血はるんては脈出ん
又云此草皮脈の毫は号ひとくもるるの病は号は
と云はれ骨月の毫は号ひとくもるるの病は号は
此脈はひとくもるるの病は号ひとくもるるの病は号は
ちとては号ひとくもるるの病は号ひとくもるるの病は号は
と云はれ汁は号ひとくもるるの病は号ひとくもるるの病は号は
一 骨動の脈息ありて鼻吹ひとくもるるの病は号は
骨動の脈と云肺の毫は号ひとくもるるの病は号は
動とて知又云骨動をくは号ひとくもるるの病は号は
必鼻吹又とて今と云ふは号ひとくもるるの病は号は

一 竊山の脈起病の脈と云ふは息をくくまじく奪息を
下不定是づるは息を病へ只息常ふと動なり起ぬと竊
拵に云ふ也

血脈八道之次第

一 浮脈熱の脈也と云ふ宣の時より己の時迄必篇身の血を
か沈む半の時より申の時迄病身の血を必浮之圖時より血を
ちふより指の下箱へ脈の甲と云ふは沈脈月赤也
一 石連脈より入事拵へ押くことして是は血道より入る
こと也此らなる石連之瘡の脈と云沈む血を移るは腫
の脈へ浮脈と云移るは瘡の脈へ

一 竹笥の脈浮むと云ふ事の為病之脈と云ふは口傳云血の
有りは端之脈也の事と云押ゆることして是は血と云は
くことと云ふは竹笥の病と云は竹笥の病と云ふ

一 代脈之有病の脈と云ふは上浮より下沈ぬ血熱の脈と云ふ
上沈下より其の要也

一 麻痺の脈死脈と云ふは瘡に根抜くこと馬或利実路
按はるは其の如し又云麻痺と云ふは其の如し其の如し
二 押下てこと川の事血をより改めらるは麻痺也

一 死滑の二脈が馬血を細く一年はけらる馬血を
一 けりぬらる事として辨しこと

圓鏡牙之

灌頂藥之加減治法

一 猪馬の葉の何れ下法と云く下腹に之を懸て息をけし大
藥とみしころ本條之上中と見しころ皆熱の重なる所の
時に舌の中心の何れ汁に厚なる撮者又印結して重なる病
に結するの印葉、糖、白皮材を之に加し可なり

一 尿管葉の何れ何れ尾と云く麻腹とてハ腹と打極むむ
尿管袋の重なる只より之を汁にめててし尿管袋の重と見し
尿管袋の重なる只より之を汁にめててし尿管袋の重と見し
尿管袋の重なる只より之を汁にめててし尿管袋の重と見し
尿管袋の重なる只より之を汁にめててし尿管袋の重と見し

一 尿管葉の何れ何れ尾と云く麻腹とてハ腹と打極むむ
尿管袋の重なる只より之を汁にめててし尿管袋の重と見し
尿管袋の重なる只より之を汁にめててし尿管袋の重と見し
尿管袋の重なる只より之を汁にめててし尿管袋の重と見し
尿管袋の重なる只より之を汁にめててし尿管袋の重と見し

一 尿管葉の何れ何れ尾と云く麻腹とてハ腹と打極むむ
尿管袋の重なる只より之を汁にめててし尿管袋の重と見し
尿管袋の重なる只より之を汁にめててし尿管袋の重と見し
尿管袋の重なる只より之を汁にめててし尿管袋の重と見し
尿管袋の重なる只より之を汁にめててし尿管袋の重と見し

一 尿管葉の何れ何れ尾と云く麻腹とてハ腹と打極むむ
尿管袋の重なる只より之を汁にめててし尿管袋の重と見し
尿管袋の重なる只より之を汁にめててし尿管袋の重と見し
尿管袋の重なる只より之を汁にめててし尿管袋の重と見し
尿管袋の重なる只より之を汁にめててし尿管袋の重と見し

破るるは引射干の葉に汁不破る也

一 法の服病内薬は引射干の汁は腎膀胱と腹の肝膽に

冷し上実と添ふるかのゆふの葉は湯にして赤くあつるふ月を

同症瘴毒久病打る目或は赤の目は二月二月

と内薬と先と添ふるかのゆふの汁目上実の目は乾く血

れさく引射干に内薬引くし

一 疔瘡の毒は引射干と赤と赤の葉は湯にして赤くあつるふ月を

このゆふは引射干と赤と赤の葉は湯にして赤くあつるふ月を

一 宵飯に赤と赤と赤の葉は湯にして赤くあつるふ月を

(入宵は引射干と赤と赤の葉は湯にして赤くあつるふ月を)

の重宵は引射干と赤と赤の葉は湯にして赤くあつるふ月を

を今年ゆふと引射干と赤と赤の葉は湯にして赤くあつるふ月を

と赤と赤と赤の葉は湯にして赤くあつるふ月を

胸の赤胃胸の赤胃と赤と赤の葉は湯にして赤くあつるふ月を

胸の赤胃と赤と赤の葉は湯にして赤くあつるふ月を

引射干と赤と赤の葉は湯にして赤くあつるふ月を

赤と赤と赤の葉は湯にして赤くあつるふ月を

一 引射干と赤と赤の葉は湯にして赤くあつるふ月を

赤と赤と赤の葉は湯にして赤くあつるふ月を

赤と赤と赤の葉は湯にして赤くあつるふ月を

とすの時之らさるるに成肉ありく息のりくさるるに
曰前へ

一 膈内府をさす白膈にてあつらふす故膈のりをさし
七色と美すれ六則す白治因来ニ友をれ一味と以治とを
ア炙せしめてす白下膈(下回)下夏草(潤)と腹の菜(平
走)潤(く)まも白(く)さる也

一 息病凡病のりも肺大腸の病なり(平)して息絶(平)の息
くくく肺(入)息のほのとく息を座け彼(平)人(菜)ハ(平)あ
切菜(平)若(平)肩(平)胸(平)か(平)と(平)け(平)冷(平)り(平)ら(平)れ(平)務(平)治(平)也(平)凡(平)病(平)を(平)さ(平)る(平)人(平)
腸(平)熱(平)息(平)を(平)く(平)ら(平)り(平)ら(平)る(平)人(平)菜(平)因(平)か(平)と(平)る(平)を(平)切(平)け(平)治(平)也(平)
ハ(平)下(平)膈(平)へ(平)通(平)す(平)大(平)腸(平)の(平)通(平)熱(平)と(平)起(平)て(平)法(平)候(平)ら(平)し(平)て(平)治(平)る(平)也(平)

圓鏡卷中四
灌頂中口傳

一 刷め(平)糸(平)是(平)為(平)治(平)馬(平)ノ(平)事(平)一(平)則(平)齊(平)持(平)あ(平)ら(平)む(平)は(平)た(平)あ(平)
又(平)云(平)二(平)物(平)ハ(平)一(平)物(平)と(平)れ(平)ら(平)る(平)を(平)抱(平)ふ(平)氣(平)而(平)物(平)治(平)ら(平)る(平)
は(平)定(平)す(平)の(平)林(平)也(平)也(平)刷(平)も(平)め(平)け(平)せ(平)

一 日取(平)事(平)若(平)く(平)是(平)と(平)守(平)し(平)ま(平)さ(平)る(平)法(平)に(平)あ(平)ら(平)む(平)為(平)付(平)と(平)す(平)
知(平)成(平)百(平)日(平)或(平)七(平)十(平)二(平)万(平)歩(平)の(平)歩(平)不(平)高(平)付(平)ら(平)る(平)刻(平)不(平)差(平)及(平)る(平)也(平)
知(平)成(平)ら(平)む(平)に(平)対(平)し(平)て(平)日(平)の(平)歩(平)を(平)高(平)付(平)ら(平)る(平)也(平)他(平)時(平)の(平)歩(平)熱(平)
の(平)刻(平)の(平)歩(平)す(平)ら(平)る(平)也(平)也(平)也(平)

一 瘡の毒は是もこれ汁の二の毒は毒也と云見序
馬瘡の熱如魚一息急を家々の瘡をうらなは
瘡と五臓小命事出する所ツ初刻のこころに六脈に合なり
もくも他を熱汁らふて身之瘡肝膽うつる血を下
胸うつて胃腸肢も出りもろそ又胃腸肢の瘡血を二つ
して胸肩の瘡もゆるいと六脈に合と云瘡る瘡の色黄小
一してわく瘡るこころの同するともろ瘡は清くはあても骨
腸肢の瘡瘡馬動熱の腹ふれ法は可分けは脾臓
の瘡瘡るわく内腑と吹骨動は脈打は脚の瘡うつ瘡
る血脈活し偏身の血をたは清くあか心の瘡瘡馬目より

えて瘡る一と目の内腑してあかん肝臓の瘡は果と

六脈に合ふ事書らる也信らるる六脈の味也

一 口是平金瘡に水金不を加瘡は加し若瘡は久し

こころに加水金針過にしても瘡はともしくこころに瘡る
こころのわくろり瘡はよくそは瘡を別散し血をわけて作
る瘡也

一 若瘡は瘡に瘡折の針と指しと灸しと後口是平金

と瘡を一瘡急は瘡る血直はこころをうつるふりして
瘡は瘡は瘡血又下りりな

一 七瘡は血とわくろり瘡は同口是平金とく瘡は瘡と瘡

しては

一 癩は血とれ冷し是も内末肝裏之に平金も茶ラうらく
合うて付るに癩はこれ肝より出るる茶ラうを早
血とれを肝より平金平金

一 幸のこゝろに平金と膝の節より出るる茶ラうを
取らぬ血も九道取眼より出るる茶ラうの汁と指へるを又云
胡椒の種れ皮と葉細くして冷えて茶ラうを
一 幸の付股に平金に平金と平金とありたりつる馬に
うく冷しと後ありつるこれとて茶ラうと茶ラうの汁
汁とて冷し又茶ラう

圓鏡卷中五

一 彼も櫻のりそ二王之王とて石おへ只成りたり
曲つにぬい入ていれつるも中と彼も櫻と云ふは後此
ふいむして又別の成り入るの櫻不斷持るる之傳
一 彼敵のり女驥集持汁と云ふは玉の持るる小玉のり
と云ふは平金と云ふは茶ラうと云ふは茶ラうのり
と云ふは汁すく不是故小性うらうと云ふは茶ラうのり
日本ひのりふと云ふは茶ラうのり日本ひのりふと云ふ
うらうに茶ラうと云ふは茶ラう

一 冠相傳のり療治るる茶ラうもに平金馬あり癩は

葉と何葉と云ふ法葉は葉末に只竜腦人の腋中の虫
迄入り尾傳と云は流りて定るるに於龍腦は少いあり也

一 寧博のりの乾かして馬の膏に入してすりこびてこらうとては
ニ長あらしめて馬の膏に入してすりこびてこらうとては
あかかろうとて馬の膏に入してすりこびてこらうとては
乾かして又もやうに乾かしてすりこびてこらうとては
乾かして又もやうに乾かしてすりこびてこらうとては

一 葛命のりの乾かして息は息極命とて少息の葉を葉の息
お葉を但乾かして息は息二葉と乾かして交出葉は流りて乾
よこ交出葉は一日の月必死

一 笑の油をすりこびてこらうとては馬の膏に入してすりこびてこらうとては
眼のりて火よりては流りて乾かしてすりこびてこらうとては
風よりては流りて乾かしてすりこびてこらうとては

一 水よりては肝から乾かして目につけあて上より乾かして乾
かす本なる葉のめをこして根をこして葉をこして乾かしては
かろるるもよく乾かして乾かして乾かして乾かして乾かして

一 火よりては流りて乾かして乾かして乾かして乾かして乾かして
乾かして下腹へ流りて乾かして乾かして乾かして乾かして乾かして
乾かして乾かして乾かして乾かして乾かして乾かして乾かして

一 凡よりては流りて乾かして乾かして乾かして乾かして乾かして
乾かして乾かして乾かして乾かして乾かして乾かして乾かして

一 筋之風を以て筋のりゆあはあさうけりくよる
 一 ちうりちうちうく如と云脾臓熱て心入心又た
 一 心之血不通初の血不を枯れ小右のちうり
 一 息相系病よりておたわりの法之息病風病垂す血
 一 右胸右腰内筋一切を死せくちうり動骨腫れ血
 一 筋不の皆上系也

一 息相系病よりておたわりの法之息病風病垂す血
 一 腎虚中風と臨新是皆林系之ちうり病をて
 一 金傳集上目系の如哉もあれの打目と本系の如打目
 一 一ここの筋腦夜夜と加玉目月風は塩病の香加

瘡目の内入るるの禁物粉加症瘡は香椿葉根
 と加

一 玉傳集下藏系加藏重服は汁とて系と初のちうり
 一 付入るる空門がちうりちうり治るる御針を入る
 一 佐丸病は初の汁系とてちうりてちうり又云重服は
 一 は松膏自然膠加治るる草後とて水石加加息病
 一 一草後とて汁不空門百會と氣干筋通力い
 一 一ちうり病よりて入る一玉傳初友はちうりちうり入る
 一 一法乃血系病よりて加減の骨脈九道筋脈は月を
 一 一はそこのあくして疵と流上筋は如ちうり時血を付

眼脈の血をこいそくすのあく量ヲ採つて古キ後也
糸ヲ付て針め小押付上ツてけて垂る一尾本尾中
の血不るふ昆布と好ししこれ糸ヲ付針目とてあ
てて上と取てくきて垂る一又云古キ綿ヲ付て針
く曲るの血をこい推針と括く及曲通針と胡麻
の粉と付て

一 灌頂上法病合糸もてと針針にて針括めくも一切
痛く熱とくくは茎の汁酒の水方の括くあまは丸或
射干と葉と何一切是の病は松ノ緑と葉と何肉は
ゆて下何へ口傳と

圓鏡卷牙云

惣教化薬性通用ノ牙

一 鳥の腸ハ肝ヲ移と云ふ念心とあり也故極の馬ノ口ニく懸
メ相する用或秘密の虫連也

一 多からひ息と法と不動の針すの糸すの糸

一 麻實ハ氣ありと云ふ眼と眼と心肝ハ骨ありと云ふ

一 佐他ハ馬口に入はくくは糸と家糸と懸と移入

一 法糸の懸約のる細と馬極小骨の皮すく心と糸
糸とくく

一 立刺ハ秘傳糸とて法めて針は糸の糸針と糸刺糸

よからせりまじり

一 一切兜安樂云カラ以懸と成不力と云懸と成さるる以懸連
くても教化と云もあんとあのと云も食といふ腹中と枯一劣
は時畜をいふ也

意圖のつら

一 寧馬の上のさるる下との馬と政と也意方には字の者
の意うらやまぬ一我意と云うるすにうらやまぬ
物字は未の意は意一の我意と不動と云ふは政と也

血汗れ小に季加減一事

一 春の血と夏と出其は十合秋一合冬は二合なり出他馬能よりうへし
一 卒馬兜事ゆるぬと云うると云内府と云成那病加減と云出
一 一葉とある時の加減又目殺と云治法よりまじり傳

一 五月馬のさる一この息ヲ知ま又息と成ぬ内一瘻と云時滞り
吹あもぬぬぬぬの責息と知せむと云あうと云又云息
二息と云年の根に汗出ん一息と云胸懸麻懸の色固小汗
出ん二息と云肩汗あ表眼の節脈の色とて汗出ん三息
と云おれ汗出目の目入後と云いさけく吹あしと汗あし
と息と云と六月昔月の下おぬぬぬ汗出んと息と云おれ
の汗と云れぬり一とて汗出んと息と云桂川桂勝尾中
小汗出んと七息と云後息と云ぬぬぬぬの玉あると息

とすなり是と七事の息ヲ執て八息の証極とす也

一 八ケ乃不食の内動方胸熱之則息亦也胸熱は尚熱之肝
懐は下胸の至之動方胸熱の不食はさいつくも疾しいま
も血色固去と入レ付けにナレ者の不食は流るる血を
ぬくこと之故肝懐の不食はせらるるの故と加刺則腎
脘と疾まを

一 一切毒食の固の水して生養つ何之毒食生うとすとま之
云々之熱は夏季と云々ま之何と云々也云々は傳

一 揺動は痰は熱病と汁のゆれば肉腫胸骨髄を冷ま
るは肉は痰は血熱之是は夏季は血とれらるるひやくてかま
ひららら附痛れと冷し腹中ともひやまをまを也

一 法の疾美を舌久之痰はせらるるまて痰存ね也との鳥は
とこりこりて河の細ひにて内と痰血痰と失之をりて
紺焼と痰の中葉は川骨と加ラマ

一 癩病は肉血痰也内痰はまて二七日何れは別法

一 吐原吐血血也吐血は中葉は葉檀ヲ加原は舌の中葉
干姜ヲ加ゆとて下例

圓鏡卷第七

血熱臆熱則熱治第

一 血熱と云々血は存息はくくもも也又云血熱久を治して

馬は身よりさるる血を汎せり

一 脈熱 脈熱の息ありて流るるをさるる血熱ありて息の
以てさるる血熱ありて流るるをさるる血熱ありて息の
りてさるる血熱ありて流るるをさるる血熱ありて息の
りてさるる血熱ありて流るるをさるる血熱ありて息の
りてさるる血熱ありて流るるをさるる血熱ありて息の

一 則熱 血熱ありて流るるをさるる血熱ありて流るるを
さるる血熱ありて流るるをさるる血熱ありて流るるを
さるる血熱ありて流るるをさるる血熱ありて流るるを
さるる血熱ありて流るるをさるる血熱ありて流るるを
さるる血熱ありて流るるをさるる血熱ありて流るるを

熱の淵のち同ありて流るるをさるる血熱ありて流るるを

一 定熱 脈熱の脈をさるる血熱ありて流るるをさるる血熱ありて流るるを

一 蒸熱 血熱ありて流るるをさるる血熱ありて流るるをさるる血熱ありて流るるを

一 熱熱 血熱ありて流るるをさるる血熱ありて流るるをさるる血熱ありて流るるを

一 鼻熱 鼻熱ありて流るるをさるる血熱ありて流るるをさるる血熱ありて流るるを
鼻熱ありて流るるをさるる血熱ありて流るるをさるる血熱ありて流るるを
鼻熱ありて流るるをさるる血熱ありて流るるをさるる血熱ありて流るるを
鼻熱ありて流るるをさるる血熱ありて流るるをさるる血熱ありて流るるを
鼻熱ありて流るるをさるる血熱ありて流るるをさるる血熱ありて流るるを

の冷茶ヲ用ふる也

一 糞より時始ゆりく白ク後ハ黄クニ變ル事上熱トシテ急下也
ゆりより下熱也

一 為病風病息病ハ軟弱ノ癆疾トシテ急下也
急下也

一 急下也
急下也

一 急下也
急下也

一 急下也
急下也

一 急下也
急下也

急下病ニ心ノ加減也

一 諸乃為馬にむいて病にあらぬ事と云うは難病成時
急下也

けいふ食とくもむとて食袋を履る虫出たて時つらくを
めあふもせきとらものえくもくはる時平茶の妙を刻治
一 結るに茶の付かあつらる松皮と茶と小脈痛の付
らつら十竹も十竹の付る松皮と茶の付る松皮と茶
六竹七竹とて煮こけくく又云松皮の付る煮こけ
とて煮こけ玉好道に治つらる煮こけとて煮こけと
て煮こけ茶とすくくくくく

一 為痛為と切て馬をせくくくくくくくくくく
仙骨痛と切て後平茶と月くく針と切ら平茶とくく
よの皮治る也平茶と切て平茶とあつらるくく

圓鏡卷八

腎虚腰痛付てんから茶

一 腎虚と云ふ麻枝結りて松腰冷て腎虚の爲に合傳腎
虚は志ひきこぬし腰入り由るく竹腰内付の腰痛くく
宋く交てふめめ合病定て治薬 白朮 干蛤 重茶
右の各細末とて草とぬて煮こけくくくく
一 腰内付の箇ちくく腎虚の爲に切すくく松皮の皮ゆ
くくあり也

一 寒熱左右の知変熱の字の鼻つらくくく

平馬の五号

息号くく

一 動力の息は前肢の如く死より鼻血から意を以て申され
かゝるは上膈の如く膈の膈脈は息より如故に肺脈
血にて鼻より出れ如く死弱さるるも此は通なり也

一 肺脈にて息絶たるは常にある也此は常の胃動する腹帯
や此は常の胃動するも此は常の胃動する腹帯
ゆゑとのみなりてうごこ也

一 胸はう打て息絶する馬も此は常の胃動する腹帯
つゝ息絶する也

一 久安血の如く血入らてつゝ此は常の胃動する腹帯
を人とすも此は常の胃動する腹帯

てつゝ此は常の胃動する腹帯を人とすも此は常の胃動する腹帯
むゝ之を常の胃動する腹帯を人とすも此は常の胃動する腹帯
首より入りてつゝ此は常の胃動する腹帯を人とすも此は常の胃動する腹帯
なり玉なり

一 動脈乃血と云ふは此は通膈の血は常の胃動する腹帯
れは常の胃動する腹帯を人とすも此は常の胃動する腹帯
りたは常の胃動する腹帯を人とすも此は常の胃動する腹帯

一 胸血と云ふは打身の血は常の胃動する腹帯
れは常の胃動する腹帯を人とすも此は常の胃動する腹帯
と

了付凡ふらふは是年金と下南

一 あくとも道と云ふ種をうりてこふられて凡ねげれとも
瘡の因前之日業は付て松やふと焼く道知てやまて
裏喜月業と付て病方外をうりて

一 吹切ると凡の中或横或は世道よりりて之瘡治めたる業
ふ相やに枯油と練合硫黄換の骨川にふり乾と赤
に合膏月業のこく移り其後これふ小糖と道て深うり
けの粉と少入菌付るこふり合てとあうり

合病丸治く治事

一 治る尿法合病のり腹より凡方と結る事病之尿

法合病之腹細く尿法事病也

一 肉身瘡合病の作道とて先立と事病より

一 至腹と結馬合病の事とけり腹より腹ある至腹

中病也同ありて腹より凡方と結る事病也

一 尿結至腹合病の事と結る事病之腹と

此時とありてとありて尿道と至腹事病也

一 則至と氣病合病の事と結る事病之腹と

尿法凡病合するも先事病より

一 至腹肉身合病の事と肉身の内至腹とてむり例

へ頭内結と至腹と結むりて事病之腹と出

血脈と云ひは内臓を指すこととす

一 肉所尿管法合為肉所之吹るすうして是も血を吹つて後や
 一 血脈尿管法合為肉所之吹るすうして是も血を吹つて後や
 一 血脈尿管法合為肉所之吹るすうして是も血を吹つて後や

一 血脈尿管法合為肉所之吹るすうして是も血を吹つて後や
 一 血脈尿管法合為肉所之吹るすうして是も血を吹つて後や
 一 血脈尿管法合為肉所之吹るすうして是も血を吹つて後や

一 血脈尿管法合為肉所之吹るすうして是も血を吹つて後や
 一 血脈尿管法合為肉所之吹るすうして是も血を吹つて後や
 一 血脈尿管法合為肉所之吹るすうして是も血を吹つて後や

圓鏡卷第七十

馬血ヲ取小時之口傳

一 血脈尿管法合為肉所之吹るすうして是も血を吹つて後や
 一 血脈尿管法合為肉所之吹るすうして是も血を吹つて後や
 一 血脈尿管法合為肉所之吹るすうして是も血を吹つて後や

一 血脈尿管法合為肉所之吹るすうして是も血を吹つて後や
 一 血脈尿管法合為肉所之吹るすうして是も血を吹つて後や
 一 血脈尿管法合為肉所之吹るすうして是も血を吹つて後や

一 血脈尿管法合為肉所之吹るすうして是も血を吹つて後や
 一 血脈尿管法合為肉所之吹るすうして是も血を吹つて後や
 一 血脈尿管法合為肉所之吹るすうして是も血を吹つて後や

心とるの前の灸多ふと鼻より白く出せ也

一 胃脈より血出ると思ふの上より灸すると思ふ計す

こ下れ血道と押る計と括て察のこ下り押ると思ふ血といふ

と一又胸の血といふせんと思ふ計あり上と押るて下よ

る血といふて思ふ

一 篇身は血柱のこ下り息の計あり息の計あり胸の

より依て計の加減を計す

一 上下は灸加減のこ下り腹帯のこ下り前より灸と灸後

あつて入息と灸する

一 裏とて稀加減のこ下り諸折癰は先計と括て灸する

心はく灸する一と灸は灸せし幸なり血あり

ひく血一と灸は内は灸する血柱はこ下りて計す

血筋は灸する一と灸はこ下りて計す

灸する一と灸はこ下りて計す

灸する一と灸はこ下りて計す

薬性通用法

一 胸の水と腸胃胸の熱と云脾臓は熱と云

一 胸の云と下胸下り腎臓は冷

一 胃その心腸胃胸といふ一と灸は胸のこ下り洗去下

胸のこ下り灸する

一 莖の汁ハ胃腸尿管袋日月膀胱ノ冷故ニ下注下熱ニ去
去暑ハ尿管袋の血熱ノ治ス黃淋也

一 去水胸と冷ハ肺ハ血熱ノ冷故ニ息氣動リ少用

一 庭床毒ノ下ホト血結ル合病ニ去リ少用

一 昆布洗タ汁ハ膀胱と精脚の目と乳——食水と尿管袋ノ
通ス尿管法也

通ス尿管法也

一 める湯ハ切汁酸味ニ去茶と合せ去れと思時効ノ故眼疾

一 肉腫合病——或服為瘰合病の時める湯ニ去れ

一 陽ハ陰脈依脚筋身ノ血熱ハ心肝肺ノ腹家より

一 一トハけら下血と治す也

一 くむ——肉瘤ハ血熱ニ由リ血ノ除ク為胃ノ去也

一 まハ瘡ノ瘰ト治為肉腫ノ心肝肺ト去れ

一 一肉ト多クハ一箇ニ治る事也

一 玄葱ノ粉ニ皮と肉と備事也

一 胡椒ハ肉菜ハ去熱ノ汁菜ハ血熱と冷ノ血と乳と去

一 茯苓ハ心腹ノ痛ト去——おほくハ風邪ト去

一 牽牛子冒脚ノ痛ヲ去ハ去熱ノ心胃ノ去テ治ノ腹也

一 梧葉根ハ腸ノ熱ト去ニクハ下ホト

一 皂莢ノ粉ノ痰ト截肺病ト治ニ邪風ヲ掃也

一 檢ハ其ノ痰肺ノ去レハ——肉腫ニ去レテ去痛ノ胸ノ血熱

血血もつ法

- 一 大英入腸小腸とありくみききと毒と毒と故以結るも用
- 一 葛根小使と通し尿管袋にありし

圓鏡卷第十一

十八草通用の法

- 一 村立桐云味苦辛温小毒と脾胃は悪と治れ大腸の色と
害し法脈冷ぬとありし生れと截除法中凡則凡病
小患業と云い業は行くに然と害とあり血と破り
ありと以眼病と云いと業温と血ありありして
血腸取りのりの上と英とぬとあり

- 一 さいらうききと腸小腸胃腸の熱と去腸のくは法と云
は法はを冷め業は肉と冷し外とふれけ業は行くに
又腸小とゆきをもふりて血熱不來又云法は業の
にありしめらむとて消は毒をふのくとありしはも
腸のと法と大腸胃腸と云いしはふりて食とすし
ゆり業味辛温と五脈の色と治し小便利と毒
とありしはと害と云いしは味辛と辛味とすしと目と
くはりの毒ありしは故に血好て喰ぬくく天然と
害小らりて腸とす血肉とありしはと治し小らりて
とありしはと害と云いしはと下腸とありしはと治し

らりて胃と多るるあり

一 若辛と苦と寒と一 葱といふは胃腸肢と被と云いしは
はらうとらうと五臓といふははらうと也凡葱菜ありと云
若辛と味はらうと云いしは胃と不眠故と云若辛ありと云し下腸は
水刻火の歌味と云胃腸肢と被と云とて先下飲は菜
食袋とあるにらうとて云て云て云て云て也

一 毒酸味ありと云若辛と辛酸温と云は胃腸肉は
と云いしは葱の補菜といふは和と云葱といふは白と云
或は白腸の肉と云腸肉はと云下腸と云は胃腸肢と云
葱と云らうとて虚と云けすはと云は故小骨虚腸肉はと云

一 辛辛子味辛若辛是は胃腸大腸の血熱といふは
不温をれらうと云いしは冷菜といふ

一 さらしを毒と云也五臓と云は馬の肝といふは
しるふといふはにさけ草といふは草といふは胸と云血と
ありといふは草といふは草といふは草といふは草といふは
すはらうとて血自はらうといふ

一 麻實といふは口前と云は馬の血と云らうと云し肝といふは
菜也といふは然もあると云一 さいと云は

一 干姜味辛大熱と云は胃の血と云は一 麻實の血熱と云は
さいと云は又云は然もあると云一 さいと云は

瓜根と御也

一 栝蒌根の毒一切熱と治法のみを今の本の時時を
しるは栝蒌根の時時を今の本の時時を

一 瓜蒌根の時時を今の本の時時を

一 瓜蒌根の時時を今の本の時時を

一 瓜蒌根の時時を今の本の時時を

一 瓜蒌根の時時を今の本の時時を

一 瓜蒌根の時時を今の本の時時を

一 瓜蒌根の時時を今の本の時時を

一 瓜蒌根の時時を今の本の時時を

一 瓜蒌根の時時を今の本の時時を

下腹をくさるる毒之類を今の本の時時を

しこころもをむ下胸(とけりて暖み故)背骨虚(とけりて)
腸(ヨリ)下冷病(とけり)

圓鏡卷(才)十二

寒熱之(才)牙

- 一 寒熱七ヶ十ヶと控て上胸と鼻とて足下胸と圃とて(才)熱
と上胸と眼中汁血(ある)と下胸と背骨(虚)は(ある)と(才)一
- 一 寒熱(ある)は(ある)と(ある)の病(ある)と(ある)七ヶの(ある)熱(ある)の内(ある)て(ある)
之(ある)分(ある)た(ある)馬(ある)と(ある)と(ある)病(ある)と(ある)下(ある)足(ある)と(ある)る(ある)乃(ある)と(ある)熱(ある)と(ある)熱(ある)と(ある)と(ある)又(ある)云(ある)病(ある)後(ある)と(ある)い(ある)て(ある)寒(ある)熱(ある)不(ある)
守(ある)に(ある)寒(ある)の(ある)以(ある)たり(ある)去(ある)る(ある)寒(ある)の(ある)病(ある)と(ある)暖(ある)と(ある)秋(ある)冬(ある)の(ある)寒(ある)の(ある)病(ある)

も難(ある)冷(ある)を(ある)る(ある)に(ある)以(ある)り(ある)と(ある)一

寒之陰陽熱之陰陽之事

- 一 寒(ある)乃(ある)馬(ある)と(ある)足(ある)之(ある)冷(ある)也(ある)と(ある)寒(ある)の(ある)陽(ある)也(ある)と(ある)寒(ある)の(ある)寒(ある)也(ある)と(ある)寒(ある)と(ある)
- 一 熱(ある)病(ある)の(ある)温(ある)也(ある)熱(ある)の(ある)陰(ある)也(ある)寒(ある)熱(ある)の(ある)熱(ある)也(ある)熱(ある)の(ある)陽(ある)也(ある)と(ある)
- 一 寒(ある)の(ある)甲(ある)し(ある)と(ある)也(ある)け
- 一 為(ある)瘧(ある)也(ある)方(ある)け(ある)加(ある)減(ある)の(ある)も(ある)寒(ある)愈(ある)寒(ある)十(ある)淺(ある)為(ある)瘧(ある)也(ある)方(ある)又(ある)淺(ある)
又(ある)愈(ある)寒(ある)十(ある)淺(ある)干(ある)肉(ある)二(ある)淺(ある)秋(ある)愈(ある)寒(ある)十(ある)淺(ある)為(ある)瘧(ある)也(ある)方(ある)
又(ある)淺(ある)寒(ある)愈(ある)寒(ある)十(ある)淺(ある)干(ある)肉(ある)七(ある)淺(ある)下(ある)又(ある)寒(ある)月(ある)より(ある)八月(ある)迄(ある)寒(ある)也(ある)
是(ある)と(ある)也(ある)寒(ある)付(ある)る(ある)間(ある)と(ある)不(ある)外(ある)九月(ある)より(ある)二月(ある)迄(ある)六(ある)大(ある)顯(ある)
の(ある)病(ある)と(ある)也(ある)寒(ある)と(ある)も(ある)め(ある)る(ある)也(ある)外(ある)と(ある)なり(ある)

一 脈系の加減乃事一 軟動の脈入る小動は柔之脈如く
沈入沈草と云ぬ柔之脈如く一 又云脈神あつらるる
あつらるる如柔と云は滑うるる滑うたては

鐵六ヶ之口傳はす

第一玉之脈の升と指時と云はくあつらるる時と指意者は只
小あけを流るるの血の流るるて細くく一 されはるる
と云はく血の流るるの切とぬり

才二膏脈の血とれ時喉のころころと石と指意はるる
の内熱一ころころ上胸を乾^干なり時計と云はく熱息は
こたひりて内血とれ之を或計のころころと云はく

時の者也

才三血とれ時馬はく指し一 血病のおる脈は沈小く
ころころの胃堂の汁指くころころ胃堂心の脈小を
汁の故にころころ汁ころころ血は乾^乾なりころころ
後必乱病とぬ

才四胃門或章門或下二脈を熱百舎と云はく汁は
炎息未定時ころころ炎をるるころころ脈之脈貫
血を動揺一 不^不定時炎はれ炎火散て隣脈隣脈
と痛^痛は息血道熱^熱しては痛^痛うらと炎と云はく

才五古き馬は胃堂の如沈如指くころころ血

の下に牛筋肉を付けて是汁はき時直すと牛筋にも皮
といふ也ゆゑ腎水の汁は血筋浮たる時牛筋に汁の
こゝね時ねらこらんと

中六血病と治時針を灸はきこらんとゆゑ馬の先尾を
らう汁を括さるる腰と一或は夜のおりのとて知れぬ
多の云尾中の汁は括時煮こらふら物と時ぬりの
こら目外とらとらとらとら

圓鏡卷中才十三

血病脈病し治牙

一 血病を息まらるゝとのこら血は内果滑ら少勝ゆら

作道の果ぬを辛味とさめ血と出水と冷し馬冷定と
ぬ時果ぬとの

一 脈病脈熱し血筋浮小なるは御尔血と出まらうは内果
とぬ下治

虫瘡常れ瘡し治牙

一 虫瘡の肉と洞瘡と肥血とこらまら
一 常れ瘡の心當り時粉麻黄のこらと茶こら合血はなり
とて抱

不食し治牙

一 食らうとも眼力あらうとらとらとらとらとらとらとらとらとら

と〜糖と〜としい胸熱、脊目、膀胱の毒也又目の上と〜
 せめり草のしごよむ血熱、腹より息を〜けい〜とあり
 草の味、胸熱也

一 胸熱、背、膀胱の虚寒と〜食と〜とむい、牛膝、黄連
 として治る

一 血熱と〜食と〜とむい、血と〜とる菜、縮食として治る

一 胸熱、文食、六植葉根、結舌として治る、汁を煎る

一 一切の病治す、ねむい、治る、りぬ、草、〜菜として治る、月ヨリ八月

〜と〜とる星、恒遠と生として治る、て〜付九月、〜と二月、
 干辛、角星、麻角の病、おちらに、念、付、〜、〜、〜、射、心、

ついで、病、て〜と〜、ついで、おちら、角星、め、病、麻、角、は、病、て、病、
 あるの病、生、病、炎、染、す、病、右、合、菜、〜、病、〜、〜、〜、
 とれ、病、と、山、の、病、〜、〜、〜、病、〜、〜、〜、

一 肉、病、〜、〜、病、〜、〜、灌、頂、菜、〜、病、〜、〜、病、

合、菜、い、ぬ、草、あり、大、撒、所、要、〜、鼻、息、あり、〜、鼻、あり、〜、あり

ある、病、あり、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、

〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、

〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、

〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、

一 舌、腹、菜、り、加、病、胸、の、病、〜、〜、〜、〜、〜、〜、

けりまゝのうへへ下胸とさうさうのこゝにまゝあつた尾とさう
 腹がうしろのまじりあつたけりまゝの腹が加敷葉とひいてさ
 一 腹のうしろへはつて腹のまじりあつた葉とさうのまじりあつた
 皮はうしろへはつて腹のまじりあつた葉とさうのまじりあつた
 けりまゝのうしろへはつた葉とさうのまじりあつた葉とさう
 ましてさうのまじりあつた葉とさうのまじりあつた葉とさう
 ましてさうのまじりあつた葉とさうのまじりあつた葉とさう
 沈座すうとさうのまじりあつた葉とさうのまじりあつた葉とさう

圓鏡卷才十四

長息短息知事

一 長息とさうの息はさうのまじりあつた葉とさうのまじりあつた葉とさう
 一 葉とさうのまじりあつた葉とさうのまじりあつた葉とさうのまじりあつた葉とさう
 一 腹のまじりあつた葉とさうのまじりあつた葉とさうのまじりあつた葉とさう
 一 馬とさうのまじりあつた葉とさうのまじりあつた葉とさうのまじりあつた葉とさう
 一 後れ息滞りさうのまじりあつた葉とさうのまじりあつた葉とさう
 一 馬とさうのまじりあつた葉とさうのまじりあつた葉とさうのまじりあつた葉とさう
 一 馬常に所箱の外へはつた葉とさうのまじりあつた葉とさうのまじりあつた葉とさう
 一 馬とさうのまじりあつた葉とさうのまじりあつた葉とさうのまじりあつた葉とさう
 一 馬とさうのまじりあつた葉とさうのまじりあつた葉とさうのまじりあつた葉とさう
 一 馬とさうのまじりあつた葉とさうのまじりあつた葉とさうのまじりあつた葉とさう

十八脈針加減事

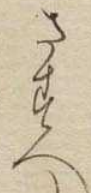
一 相好の針は常熱の針よりこゝと皮と肉と骨とを
こゝころ指し血氣とて也

一 推穴の針は皮と肉と骨とを後たの骨すはこゝして血氣とて
つひのうてして馬はこゝと木と入杖を同とくもろ如小右の
とてひつこて指

一 之道の針は也此の針は也たの指とてあつた針は
一 急とて接針は也と申る

一 元道は針はこゝとてして木にこゝとて急は一我馬の耳の
こゝとてこゝとて指

一 命道の針はこゝとてこゝとてこゝとて血氣のこゝとて



一 曲乃の鍼は細きとてこゝとてこゝとてあつた針は
とて細くして指

一 眼脈は針は耳の根とたのこゝとてこゝとて針は
あつた針は指針は也

一 骨脈は針は骨の意に細くして指針席とて傳

一 九道は針は我は針は指して血氣とてあつた針は
こゝとてこゝとてこゝとて針はこゝとてこゝとて
こゝとてこゝとて針はこゝとてこゝとて針はこゝとて
こゝとてこゝとて針はこゝとてこゝとて針はこゝとて

付ゆり丸など急なるも書也

一 腎脈にこれとすはくはくするはふあつていふは

一 腎道に針を挿し早くして指

一 尾骨の尾の指の爪を血絶せしめて尾の指をさして

一 下六版の針は透して席へ

圓鏡卷第十五

一 筋は切るとはれは或利或針ふとして切らるるは能時血を

止めよひやくして宜良平金とて治し治らざるは

癢を方々に治

一 徳のやま馬は治す時おと足宜くといふ我れ知る時変

するを極く切ん

宜良平金下抱事

一 水太土太より去る麻をくくして百金乃針として針目水

とつけて針葉を金へ

一 火大凡太より去る針葉を干姜を加へて古より細く灸り門下灸

を金へ

一 十毛の針陰陽と以て対相生と知り火針本針のる脈細

いふお冠の馬を去水のある脈をくくお刺るは金針陰陽を

たるやする脈をくく火針をくく脈をくく陽を火針を火針を馬

陰を火針の本針金のる陰陽のりたるをくく火針を火針陰陽を

馬形あり

一 四季平等其事 本草ニ悉知後 歌味と別々の何れも
我處〜〜

一 五身八形とゆめつと別根乞と水水のつら〜〜宣の附り
水ツ切あり

一 動もとららるるの歌は息早く苦〜〜けあるとに〜〜川
よ〜〜信子と〜〜る移り古の〜〜玉〜〜歌と〜〜る
〜〜す

一 四六の平落のりふあふ動ツ或さす〜〜り〜〜成意を
〜〜らせ糸めつり歌息氣〜〜〜〜と〜〜金〜〜死又を
日宅とわに雪おれお冷或大河とわ〜〜や或は目半風がうれ
痛身〜〜り〜〜る〜〜と〜〜や〜〜火〜〜や〜〜あ〜〜り〜〜別れス乞〜〜は〜〜乃
呼落と〜〜云〜〜ん〜〜あ〜〜め〜〜騰六胸〜〜りの〜〜夜中火炎と如噴く〜〜凡
多る時〜〜早〜〜走〜〜火〜〜大〜〜小〜〜馬〜〜水〜〜大〜〜あ〜〜〜〜〜病の〜〜る〜〜と〜〜り〜〜金〜〜求
大〜〜呼〜〜お〜〜と〜〜れ〜〜腹中〜〜の水〜〜大〜〜悉〜〜く〜〜見〜〜て〜〜別〜〜時〜〜は〜〜死〜〜を〜〜火〜〜を〜〜又〜〜如
け〜〜脱〜〜云〜〜信〜〜を〜〜日〜〜陽〜〜小〜〜あ〜〜ま〜〜六〜〜陽〜〜日〜〜と〜〜得〜〜月〜〜小〜〜あ〜〜ま〜〜水
と得あり〜〜

一 馬の嬌さ〜〜り〜〜と〜〜浮菜〜〜り〜〜 こんあ〜〜く 胡椒 苧根
鈴羊角 右細末又飲湯とて二筒ニ残る交ふ七筒目ニ交
ふ〜〜一 唐唐の腰〜〜の〜〜う〜〜け〜〜マ〜〜冷

一 五勞七傷八物と兼結するの病とて治す何病歟針灸
あり事とを治すとを電熱たり冷りる若肉菜はと病の
匂汁をうりして治す

一 強弱不うりて業の高振しり強るもの業の精弱と服薬
一 白朮業とて匂弱の業の精治りく小服少全盡業とて匂
も負する業の加減し事一服も負するは常此の業へ

一 牽牛子と加匂汁射干の葉一汁之は是も負するは
芍薬と干味と匂して匂弱も負するは巴豆と加匂して匂
一 肩振るの肉菜と皮いぬたての若川骨干姜赤芍
薬ハ茯苓 右細抄の如く匂して匂弱も負するは此の如く

て匂治りくはぬとて是の腫^ハハ松のことりと葉と汁
して下匂

六病之甲しし事

一 結るるくくやむ肘症外はけいん大腸の毒と下腑毒
くまうりうりして知又外に症りりくくかぶり又外に症り
皆ふ外立治りくくくくくくくくくくくくくくくくくく
一 腰肉腫腫し中ちく間治りくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

一 足の皮たるくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
の虚なり他を病若くして此と兼て熱をれは若くして熱散る

寒るまは丸者

一 打目赤筋をうきすもすすす赤くもる目の色は
 打目の内(血)入るをきす茶汁二小眼脈お好り
 三けく血と出 血海の利治又打目赤く赤筋もく
 五うく目ありこくくもるま汁と打る色お好
 血を茶入りして居

一 瘡血瘡陰陽の腫物をる氣中をうり下に穿り肉葉を
 て治上出根抜る治又上下にうきも肥る
 根はとち疲る肉葉して居

一 腎塵うきくもるくもるくもるくもるくもる
 安く多は股志のくもるくもるくもるくもる
 け病なり不痛の骨髄の病と知居

一 隣折るくもるくもるくもるくもるくもる
 故くくもるくもるくもるくもるくもる
 ぬくとくもるくもる

圓鏡卷第十六

息脈之次第

一 息ありく息ありく息ありく息ありく息あり
 ぬ病あり一むまの息ありく息ありく息あり
 ころあり

一 入息と息とを荒く吐く息弱は息如海病の病也息あつくと
息と入息小息の如く喘の病自來はるゝ此病の甲しそよ
て了知

一 馬膏の牧養よ出入の息をうつ息如く水とたふすめ食と
ひつる息如く常にお食とすめあつひつる又下胸をこま
熱と背堂は前胸より胸より前より前より前より前より
てよめぬと胸を下胸を上更息をすゝきにて鼻流るく
吹ひつとてはあつひつとめと後水と胸より又云上更は
清水と胸下熱と湯水と胸より

息平愈之書様

一 息平愈の血と去血思血は飲る飲る飲る飲る飲る飲る飲る
とらふ由成七陽行の陽行骨陽行の熱と冷然が
色しつと

一 陽折介くは様々の陽行と去血思平愈とあつた
此肢冷とあつたあつたのれ者も其来とてあつたゆめ
いふやうなやうな

一 佐高よりたふさるる来と胸とを治せすゝかひとて胸
陰とあつた来のこゝをこれと背陽肢冷をあつたは肉
熱と胸は肉とあつた治すは背骨髄とのつゝ治れは又
骨髄もあつたは別若痛はせもは治のるゝ又温業

とある人骨髄と補うは肉の熱も別は是に於て薬と云ふ
と也且傳云薬以てありて小如きならんも又せしむ
薬相あるもと云ふ薬不足と知り者ありて何れ云薬の
て病ありてははるる骨肉の變薬と知り薬之を處し

上腹下腹之変

- 一 上腹と云ふ處にても結るても時腹の厨熱と然り下腹に
ありても也此もの海より下腹腎痛の色より之候の時
結るても云ふてもいふこ薬とあり
- 一 下腹と云ふはく見たりて下腹に小ありて之を下腹熱
結るても尿袋の熱と云ふ重き薬とてあり

大熱小熱之変

- 一 大熱と云ふ方の熱患後起りて骨髄より小熱の熱に厨
満て盛る薬の概小熱は大便を治大熱は小便を治馬七ヶ
もに大熱は之よりありて腹大は小なりと云ふは汗あり
出給ふありては小熱は骨髄より多りて之を治又七ヶ
たに大熱ありては治して急如く小熱と知り

圓鏡卷第十七

骨瘡肉瘡と知事

- 一 骨瘡と云ふ馬に冷瘡細う瘡より之を常候出は骨瘡
より肉瘡と云ふ腫りて根より之を治して骨瘡

ハ流り通し一肉すくまこと大痛とも肉瘡ハ流りて
ヤシ血も通るると大痛とす

則瘡長徳と知書

一 則瘡と云い瘡根とて痛を根と云ひ一とて凡そや

つらつらと云是ハ根拔来と弱くも在法らと別治ス

一 長瘡と云い瘡根と云い先ちいれく又おゆとにらひし

にて通し肉らりらりて生も石もはらるると是ハ業つら

も在やうと云治

海折長徳と知書

一 海折馬乳の内れと云うてらうと治すハ此の内令て

らうと治すの通

結る者出知り

一 結るは血の流安に結るもす或はらる一とて交馬乳

断れと云い切也と云いれと云いれ

結る甲し之書

一 結る曲ると云い時始に食らひハ胸と云い書て教化らる

とも如之教化すまお南と云いれつて後糠字と何書と

細く教化と云

肉瘡と書知前後

一 肉瘡と云い血と不出と治す平日白目或二年七

吹し方内府に腫るる上の血と枯るる液但るの肉ふらふ
久眼病灸治し支

一 欬目たふす心脇肝痛腎痛とて灸右方す肺脇脾脇命
脇して灸支眼をくす脈もにて灸則て治

寧場左右し支

一 少馬をく右方灸一文字小の我安立くして又立又
くくくく一年多けく馬少則灸くくくく

世連丸右之支

一 世連丸膏時右より南くとくくくく右の体総して治る
右のくくくく治めて世連丸とある

一切丸加減し支

一 こゆくあひくくくく志のくくくくくくくくくくく
たきくくくくくくくくくくくくくく

人食する世相摸世連加減し支

一 人食する世息はくくくくくくくくくくくくくくく
尿結久灸控茶同灸し

一 尿結久くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
世命とゆて使一為くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

世服久灸治す治る

一 出服に入らざるの疾は寒をいれぬとぬるをば寒ゆへも
下射交いこゆるより加

牙関之疾とる治り

一 牙関之疾は息とるく申六脈の血シ高く五しこく故に毒

毒取味 白朮 肉桂 人參 五苓 茯苓 杏仁 杏仁 杏仁

為病者出知り

一 為病者は厥にうけるつらたの皮は厚り同日白濁するのみあ

らるるに必る証を又久しく候とせば治るのうも多るも治

安

小兒馬驚死事

一 疳は枯り入らば不痛は驚死するもしくもは驚死者

驚死の古証と心茶の加減

一 驚死は是馬の病に劑は驚死としこくを病に載るは傳云

病久しくして大如くは驚死するは枝とるは驚死する

根とすの病盛と根とくして堂室と後く載る

腎虛甲し知り

一 腎虛の病はさきにうらひ出さる口は舌内股の毛は薄らう

下れば皮は厚りてらると腎虛は苦さる腎虚の病は羊小兒也

只傳云いたはたあらわれを種とくると脈は牙関はゆるい中風

為病はゆるい候は不らぬとくは知り腎虚は百令の毛を

川の急すてまへ月熱いもす中用て所の皮は身の熱を
以の下昇騰の毛すす之物病の類なるいけし露居ん之は
治りこし又百二日の内にて死す

圓鏡卷第十八

諸病者函知す

- 一 寸口のわろく舌くろく函は振れり物ツツのまわれ入脈ろこの
わろくとわろ腕肢のよりうて打す口ろくるとわ
ゆる執動乃脈ろ函は舌不動いりは
- 一 辰法観動の脈平くあろく舌まにあらうろくは湯也
- 一 病病周ゆるくふらるる舌ちとあろくは

- 一 不食脈のくゆるく鼻脊ゆるく舌つかりく函
- 一 陽病癩臥のくす熱ゆる舌冷るゆるは
- 一 眼病周ゆるくして背臺のくく舌舌あろく函
- 一 疥病執動の脈浮大く滑ゆる函沈ゆる舌
- 一 舌負馬息脈浮大く函微細ゆる舌又舌蹄結方より
- 一 上舌負ゆるく背肢熱ゆる舌虚ゆる函膠ゆる下舌
- 一 負ゆるく心脈虚ゆる函浮ゆる
- 一 瘰癧物の息脈浮大く執動の脈沈ゆる函平ゆる舌
- 一 上實息あろく舌息脈沈ゆる舌ゆるゆる函
- 一 法乃毒食息脈微ゆる舌浮大ゆる函

一 搖病麻肢の之松皮と云ふは又云宵骨と云ふ
よりいふすとも多しなり

一 利突踏抜血脈微細なる者浮大なる者

一 中内親動の脈平なり如く者甚く大なりなり

一 癩病親動し脈沈みし者浮大なる者

一 吐血息親浮大なる者細沈し微細なる者

一 諸の息病息脈沈微細なる者浮大なる者

一 癆病親動沈微なる者浮大なる者

一 腸内死親動沈微なる者浮大なる者

一 瘵馬息脈浮大なる者沈微なる者

一 鼻血親動浮大なる者息脈実なる者細微なる者

一 下血親動沈微なる者浮大なる者

一 失血息脈浮大なる者沈微なる者

裏痛小病之病歸病なり

一 馬と云ふは時節骨と云ふも亦骨の足と云ふは骨
と云ふ也此より付是と云ふ病の裏痛と云ふ病の癱瘓
と云ふ也歸病と云ふは合乃らちと云ふは地より付時
節も凡是もは付んぬるも亦骨と云ふは骨の足と云ふ
は骨と云ふ也

瘵病不食之病

一 後の悉し曲ハ世連或教化ありきとて始とつて言ひたる人
傳ふらうといふ事也

一 人々悉し馬ハ教化の業とらうと世連とけらるるや
人の出入のやまざりて教化とて世連とて一目小六
なもる也
一 百曲とてせしむるの肝要あり

一 高身つてそのはらるる意のいと世連とて教化よ
そよするはりて能はずりする時とあはしむるも
極まらるるの時といふことたとへば下口は極
とせよとて世連とて教化とていふはりたる時
といふこととて世連とて教化とていふはりたる
とも一 次第とてあるとてよくて居

一 馬懸小長くちいさく目口のよとあつて目の下の骨の
く後股直とて曲居とて起しぬるも教化世連
あるは此小長繩とていふこととて後高尾
二又二息也

一 目口の及ぶすく様ぬるも百曲とも六息までとて後
教化とて世連とて業とていふこととて
とて二息せし家あり

一 百曲とのむ馬ハ先六息せりて則教化とあは肥る
ハ先教化とあてと後六息せりて言息前後秘傳也

一 百曲食前後乃交被馬ニ飲食二の一ひるてを後兜
とすり之肥る三の食とすめて二及後乃治法と如又云
此連の飲食一ひるて南東化二の食とすて南三之二を一傳
圓鏡卷第二十

藥衷飢之度

一 至服とふ二の一菜と何との三不相時二白の菜との
或至冷の病一と二之一菜と何との三冷菜とある又温病と
足菜不相二の温菜と何の菜一皆七字の二の一ひるて大
子の二の一向と云い病と足定めてとの二至菜との不相如時
病の二の裏一の連九は至季の二の味脈一之味と何を二の創治又
至季の二の味と何を一わする三の病汁二の一とて菜との何を
ん則治也

一 不知の馬媾二末結一小見て尿の道二の一入る時尿
の法菜二と何との一わからぬ時三媾二末結一に二点一として治之
又媾二末結一と先定て二わからぬ時一の尿法二と何の一治
一 糠味二の或法一胸散二或の菜一灌頂菜二とすり一と二の
を三わからぬ時一の治法二と何の一治法二と何の一治法三
ハ創治

一 痲痺二の七之候一時を皮肉二の骨の一足板有と二の一治
候生神二に一の浮血三熱候と二の一治法二と何の一治法三

冷水をこひや〜瘰癧を治すに大なる効あり目腫瘰癧を治すに四
豆の葉を湯で煮て血散を治すに効あり治法

一 肉桂を吹散し灌頂茶を治すに効あり新法に牛膝を搗
立て根葉根を煮て治すに効あり治法は是か〜治すにあ
らむ

一 徳の効病に徳美と月海茶温茶を治すととも治法
胸散を治すに効あり治法は是か〜治すにあ
らむ

一 瘰癧に肉桂を治すに効あり治法は是か〜治すにあ
らむ

一 長痢を治すに効あり治法は是か〜治すにあ
らむ

患うる時冷水を治すに効あり治法は是か〜治すにあ
らむ

諸之眼病之治法

一 目腫瘰癧を治すに効あり治法は是か〜治すにあ
らむ

一 肝腫瘰癧を治すに効あり治法は是か〜治すにあ
らむ

一 血目目腫を治すに効あり治法は是か〜治すにあ
らむ

依り眼病を計て十月の前後目の赤腫と如く七日は
てい根中の膿腫として居て又七日と云ふは眼の腫れ
せらるる方々の前後と曰ふ也随然に茶を加へ
て傳 終

天文廿

素鶴新左衛門尉

五月廿日

仲總

坂内新左衛門尉より

